

## 巻頭言：未来の地球におけるアフリカ

著者	宗像 善俊
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1988-03
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00008721">http://hdl.handle.net/2344/00008721</a>

未来の地球におけるアフリカ——・宗 像 善 俊  
(所長)

地球の年齢はおよそ46億年とされており、この地球に、人類は、発生以来百万年以上生存しているが、その歴史として我々に明らかになっているのは、わずか5～6千年に過ぎない。この人類史に関して、私は幾つかのドグマを前提にした夢を描いている。

第1のドグマは、人類がいつまで存続するかについてである。仏教に末法思想、キリスト教に終末論があるが、人間は、余程ペシミスティックにならない限り、自分がすぐに死ぬとか、人類が近く滅亡するなどと考えるものではあるまい。私も凡夫の常として、人類はこれからまだまだ発展するものだと思込んでいる。

第2に、社会的有機体というか、メンバーが同一の集団に所属していると意識する組織＝共同社会というものの領域は、生産力の発展と運輸通信手段の進歩によって、漸次拡大していくものと考えている。例えば、原始共産社会、古代社会、封建社会、近代国家と進展し、近代国家発祥の地であるヨーロッパでは、超国家のECが生成しつつある。だからいずれは(200～300年ぐらい先には)、国境と人種的偏見が無くなり、地球が一つの共同社会になると期している。

第3に、民族あるいは国家という人間の集団も、個々の人間の生身の体と同じように、成長・老化、栄枯盛衰があると思う。古代におけるエジプト、メソポタミヤ、インダス、黄河の文明、ギリシャ、ローマ等々の諸国家がその例である。近代において、世界を400～500年支配したゲルマン民族のヨーロッパも、20世紀初頭には、そのヘゲモニーをアメリカに譲った。そのアメリカがソ連側の共産世界との対抗関係において構築した自由世界も、今や、その維持には黄色人種の日本の協力が不可欠である。アジアNICSが台頭して来た。アセアン諸国もこれに続きそうである。いま最も後方にあるかに見えるブラックアフリカも、ピカソ等のキュービズムに影響を与え、ジャズ、ロック等の現代音楽のルーツになっているし、オリンピックその他スポーツの分野での活躍は目覚ましい。

黒人が文化面においても人類のヘゲモニーを握る時、その時が世界における人種的偏見の消滅する時であろう。この人種平等意識が第2に前記した主権国家の止揚と平行して、地球国家を産むことになるかと予想したい。この共同社会の生成が现阶段における歴史の地平線なのではないか。人類はこの地平線に向かって歩むべきなのではなからうかと考える。200～300年も先のことだから、その実現を現存の人間は誰も確めることはできない。

私のドグマであり、夢である。